

日本とはなにか（堺屋太一、講談社、1991年）

10年ほど前、社会教育学者バジール・ルーバン大学教授とともに、テレビ番組をつくったことがある。（p 23）バジール教授は、教育の普及徹底こそ社会をよくする、という信念の持ち主だ。そこでまず、日本の各段階の学校に案内した。小・中学校の就学率が100パーセントに近く、高校進学率が94パーセントという「教育大国」日本は、教授にも興味深かったようだ。しかし、バジール教授が最も驚いたのは東京代々木の予備校だった。

「私はこれほど真剣に勉強する若者の群れを見たことがない。彼らはいったい、何の資格を取るために勉強しているのか」と教授は尋ねた。

「いや資格のためではない、大学に入るためだ」そういった私の返答が、まず教授を驚かせた。「日本では特別に勉強しなければならないような人まで、なぜ大学へ進むのか」というのである。

「いや、彼らは大学に入れないわけではない。東京大学や京都大学などの一流大学へ入るために勉強しているのだ」と説明すると、教授は小考の後で、「分かった、日本では一流大学と他の大学とでは卒業生の初任給が違い過ぎるのだ。フランスでもグランデコールと呼ばれる一流大学の卒業生は有利だが、他の大学卒に比べて初任給の差は2倍以下だから、そんなに無理をしない」と言い出した。

「いや、日本ではどこの大学を出ても初任給にはまったく差が無い。ただ、よりよい就職をするために多くの青年が一流大学を目指すのだ」というと、

教授は、「よい就職先とはどこか」と質問した。「まず第一は大蔵省や通産省……」私がそういいかけたとき、バジール教授は手を打った。

「やっぱりそうか。フランスでもそうだが、フランスの場合は中央官庁のエリートといえども民間企業との給与差はさほど大きくないし、20年くらい勤めなければ次官や大臣、国営企業の社長にはなれない。日本は官僚を極端に優遇しているからだ」と言い出したのだ。

「とんでもない。日本の官僚は民間企業よりも給与は安く、次官になるには35年もかかる。大臣にはなれないし、天下りをして大企業なら常務か平の取締役、生涯のうちに社長になれるのは稀なのだ」と、私は丹念に説明した。

日本の国家公務員の給与は中小企業を含めた民間企業総平均にスライドしているのだから、東大卒のエリートといえども、たいていの大企業よりも低い。出世も年々遅くなり、いまでは40歳で課長、50歳でようやく局長、それから企業に天下りしても同年齢の生え抜きに比べてとくに厚遇されるわけではない。大臣になるなど夢のまた夢、激しい選挙に当選しなければならないから、局長まで勤めていては老人になってしまう。

「そうすると……この青年たちは給与が安くて出世が速くもないところに就職するために、かくも真剣に勉強しているのか」

バジール教授は天を仰ぐような仕草でそう言うと、「日本人は集団発狂したように思える」と呟いた。結論はやや短絡的だが、冷静に考えるとその通り

だ。(p 25)

.....

教室における規律の正しさも、それが生徒の自覚によるものでなく、教師の厳重な監視の結果だとしたら、教育の良否を決める尺度とはなりえない。

(p 67) どこの国でも軍隊と監獄は規律正しい。だからといって、軍隊や監獄の仕組みが最良の教育方法とはいえない。指導要領と校則に縛られた日本の学校は、それに近い状況といえなくもない。このことが生徒の個性と獨創性を抑圧しているマイナスも無視できない。

数学や理科の国際共通試験で、日本の中学生や高校生が、韓国、イスラエルと並んで優れた成績を収めているというのも、かならずしも学校教育の優秀さを示すとは限らない。日本特有の入試用受験技術が教え込まれた結果とする見方も有力だからだ。現にドイツの中学生に日本式の受験技術を3時間ほど講義したところ、たちまちその学校だけは日本以上の試験結果になったという例もある。もし、試験の成績が教育の優秀さの尺度だとすれば、その功績は学校よりも学習塾に帰すべきであろう。

ようするに、国民全員が初等教育を受け、規律正しく教師の管理に服し、数学や理科などの基礎知識と基本技能を身につけることが、教育の善悪を測る尺度とする考え方は、規格大量生産の現場で働く人間として使いやすく役に立つ人材をつくることこそ教育の目的、という発想に立ってのことである。

より大きな視野で見ると、教育の良否は、第一にその教育を受けた人

間が幸せな人生を送りうるかであり、第二には人類の繁栄と進歩とに貢献し得るかである。そして第三には同じ成果を上げるのに、本人の苦痛と父兄の負担が少なく効率的に行っているかどうかである。

今日の日本の学校教育が、こうした尺度から見たときに、優れたものといえるだろうか。現に諸外国での評価はけっして高くない。少なくとも日本の学校教育が、楽しいものではないこと、人類の進歩に役立つ想像力に富んだ個性を育てるものでないこと、そして本人の苦痛と父兄の負担の大きいものであることは確かである。

日本という社会を考える場合に重要なことは、こうした全人生的全社会的な見地からの学校教育に対する評価や批判が、日本の教育界や文部官僚からほとんど出ない点である。つまり、この国では、教育もまた教育官僚と教師の仲間内の評価に固まる内志向に徹しているのである。(p 69)

.....

パリの日本伝統工芸展では、まず入り口のテーマ展示として、一方におみこしをおき、他方に仏壇をおいた。そして、<これは日本古来の「随神（かんながら）の道（神道）」の象徴であり、仏壇はいまから1400年前に日本に流入した仏教の象徴である>という説明を書いた。

このテーマ展示の前では、フランス人観客との間に次のような問答が何度も繰り返された。

「日本には仏教徒は何人いるか？」

「1億2000万人だ」

「では、神道の信者は何人いるか？」

「1億2000万人だ」

「日本の人口は何人か？」

「1億2000万人」

フランス人は誰もが目を白黒させた。宗教を厳密に考える彼らには理解できないことだが、現実の日本の姿はそうである。

日本人のほとんどは神式で初詣もすれば、お盆の寺参りもし、クリスマスも祝う。クリチャンの首相も伊勢神宮に参拝し、盆踊りに加わり坐禅を組む。そしてそのだれも「良心のうずき」など感じることはない。

これを「多神教」などと単純化しては、日本を理解できないばかりか、ますます分からなくなる。仏教はキリスト教と同じく厳格な1神教であり、神道はヒンズー教を上回るほどの多神教である。この本質的にまったく違った2つの宗教を、1人の人間が同時に信仰できるのが日本人である。これは世界に類例の乏しい特徴であろう。

古代のギリシア・ローマの世界には、ジュピターを主神とするオリンポスの神々が信仰されていた。いまでも地中海沿岸地域には、ジュピターやネプチューン、アポロ、ビーナスなどの神殿の遺跡がたくさん残っている。しかし、それらはすべて「遺跡」であって現に活動する宗教施設ではない。ローマ帝国の後半にキリスト教が広まり、やがてコンスタンチヌス大帝によって

これがローマ帝国の国教とされると、土着のオリンポスの神々は信者を失ってしまった。今日では、オリンポスの神々は芸術や文学の作品として残るばかりで、1人の信者もいなければ、一度の祭事も行われることがない。

アルプス北側のゲルマン民族の間では、かつてゲルハラ（ワグネル）の神々への信仰があった。ゲルマン固有の土着の神々がいたのである。しかし、それもキリスト教の流入によって痕跡もなくなってしまった。

キリスト教が生まれた中近東でも、後にイスラム教が入ってきた結果、イスラム教徒とキリスト教徒ははっきり別れてしまった。数の上では圧倒的にイスラム教徒が多いのだが、キリスト教徒も何千万人かいる。レバノンなどではキリスト教徒の民兵とイスラム教徒の兵がしょっちゅう小競り合いを繰り返している。

インド亜大陸はもともとヒンズー教の盛んなところだったが、10世紀頃からイスラム教が伝播してきて、イスラム教王朝が作られた。この結果、ヒンズー教徒とイスラム教徒とが混在することになったが、いまでも両者ははっきり別れている。

韓国でも、儒教、仏教、キリスト教が混在するが、それぞれの信者は明確に分かれ、その数の合計は — 各宗教の誇大計上で多少の誤差はあるが — 国民人口とほぼ一致する。どこの国でも、1人の人間がある時点で信仰している宗教は1つなのだ。本来、宗教とはそうした排他性（いわば非寛容の精神）を持ったものなのである。

一見、日本と似ているのは中国だ。ここでは道教、仏教、儒教、祖先崇拜などが同時的に行われている。しかし、これらは長い間に相互に混合しあって、「中国的宗教総体」（余英時氏の言葉）を形成しているのであって、別々の宗教を同一人が同時に信仰しているわけではない。

ところが、なぜか日本だけは仏教が入ってきても、神道は神道のままで信者を失うことがなかったし、仏教もまた仏教として受け入れられて全国民を信者とした。同一人が神道信仰をそのまま残しながら、仏教もまた同時に信じているのである。（神仏習合）

人口1億2000万人の日本に、1億2000万人の神道の信者がいて、同時に1億2000万人の仏教徒がいる。そしておそらく同じ日に1億2000万人のキリスト教徒もいる。これは世界中でまったく例のないことだ。

どうしてそうなったのか、じつはこの信じがたい現象こそ、日本人が抵抗なく欧米近代文明を受け入れ得た基礎となった気風、いわばこの国の民族性なのである。

聖典も戒律もない信仰としての神道（p 132）

世界の中で、なぜ日本人だけが複数の宗教を同時に信じられるのか、いったい、いつからそうなったのだろうか。日本の近代化が、この社会気風とかかわっているとすれば、現在の日本を解明するためにも、この問題はきわめて重大である。

それにはまず、日本土着の宗教である神道の本質と成り立ちから研究する

必要がある。神道ほど多くの誤解をうけている宗教は、世界にも珍しいからである。

日本の神道は、ごく素朴な、いわば自然発生的な信仰である。神道に興味をもつ外国人はまず、「神道の聖典はなにか」とたずねる。だが、これには答えようがない。神道には聖典がまったくないのである。

いうまでもなく、キリスト教には「聖書」があり、イスラム教にはコーランがある。仏教にも、最初に釈迦が開いて組織的に布教したため、根本法典がある。ただ、これは1つではなくて「般若心経」や「阿弥陀経」などたくさんあり、宗派によって重要視する経典が異なるため、どれが根本法典か、即座に答えることができない。しかし、宗派を限れば、いくつかの経典を並べて最重要経典とすることは可能である。

ところが、神道にはおよそ聖典・経典に当たるものがない。

「じつは神道には聖典がないんですよ」と答えると、外国人はたいてい「あの結婚式や起工式で神主が読んでいるのは何か」と聞く。

「あ、あれはその都度、よさそうなことを書くのであって、特定の聖典から抜粋したわけではない」というと、もう一度驚く。神道ではだれでもいつでも「預言者（神の言葉を預かる人）」になれるのである。

そこで次には「神道の戒律は何か」という質問がくる。だが、ここでもまた答えられない。神道には戒律も存在しない。要するに、「悪いことをしてはいけないということです」とはいうものの、その「悪いこと」が何かを規定

した文章やいい伝えがどこにもない。「古事記」を何度よんでも戒律らしいものには出会わないのである。

神道における八百万の神の概念は、雷や台風などの自然現象、山、滝、大石などの自然物であり、それに先祖崇拝の思想が重なって出来上がっている。このこと自体は世界中どこでも起こりやすい宗教の原初形態といってもよい。しかし、その原初的形態が、今日に至るまで聖典も戒律もないままにつづいてきたのは珍しい。つまり神道は、宗教としての絶対的価値観、つまり、「神の言葉と掟」を持たないのである。そしてそのことが、神道に永久の生命を与えた。絶対的な価値観がないせいで、他の価値観と共存できたのである。

しかし、やがて日本人も、より精巧厳格な宗教にであう。最初は朝鮮半島から、やがては中国から、仏教が入ってきた。それは、インドで発生して以来、すでに千年を経過し、西域、中国、朝鮮を経て極度に洗練された宗教であった。

仏教が最初に日本に入ってきたのは、「古事記」の記載によると欽明天応の時代（539年～571年）といわれる。このとき、欽明天皇は百済から贈られた仏像を蘇我稲目に授け、蘇我氏で祀るように仰せられた、というのである。

実際には、仏教の思想はもっと早く入ったに違いない。当時は朝鮮半島から日本に移り住む帰化人がかなりいたから、そういう人たちが仏教を持ち込んでいたはずである。したがって、「古事記」のこの記事は、天皇が、つまり

政府が仏教信仰の自由を認めたとき、民間において信仰することを了承したとき、と考えるとよいだろう。日本の神道が明確な規則、原則、戒律などを持たなかったため、仏教に対してもおおらかに認められたのではないだろうか。

(p 134)

.....

複数の宗教を同時に信仰できるとなれば、各宗教のなかから都合のよい部分を取り出す「いいとこどり」の慣習が生まれ、「絶対不可侵なる神の教えと掟」が存在しなくなってしまう。(p 144) そんなことが、文字を知ったのと同じぐらい早く起こったため、この国土着の宗教である神道は、ついで聖典や戒律を定めることがなかった。いや、外来の仏教でさえも、この国に入ると急速に聖典と戒律を失い、「いいとこどり」の対象となってしまった。つまり体系的な形での絶対的正義感がこの国では育たなかったのだ。

遠藤周作氏は、「日本では厳格なカトリック教徒は60万人、アクティブな共産黨員も60万人。この国では厳格な外来思想はそのぐらいしか信者を持ち得ない」といったことがある。日本では「いいとこどり」を許さぬ絶対的正義感の主張は、人口の0.5%程度しか信者を持ち得ないのである。これでは、宗教戦争など起こるわけがない。

今日の世界でも、アラブとイスラエル、インドとパキスタン、アイルランドでのカトリックとプロテスタントなど、宗教の違いによる戦争や深刻な政

治対立が各地にある。しかし、われわれ日本人には、宗教の違いが戦争を
するほどの重要問題であること自体が想像できない。われわれの日常生活のな
かで、隣の人がキリスト教徒であろうが、向いの人が浄土真宗であろうが、
上に住む人々が創価学会であろうが、イスラム教徒が下の階に住もうが、ほ
とんど支障がない。せいぜい、太鼓の音がうるさいとか、客が多いとかとい
った苦情が出る程度だ。日本人の考える宗教の差とは、宗教儀式の違いに過
ぎない。」

日本の新聞や雑誌での宗教の相違の説明も、もっぱら宗教儀式の違いや食
物服装の差に限られている。これでは、それが激烈な戦争にまで発展するの
が理解できない。日本人が中東やインド亜大陸の戦争を至極容易に調停でき
ると思いがちなのも、これに起因している。

しかし、宗教の違いとは、本質的な倫理観の違い、つまり何が正しいか
という点での対立だ。厳密な意味での宗教とは、何が正しいか何が悪いかを客
観的事実や利害得失によってではなく、神の教えた聖典と戒律によって定め
たものだ。したがって信仰とは、それを議論するまでもなく信じ守ることに
他ならない。そうした宗教信仰の慣習を持つ人々は、他の事柄に関しても、
とにかく絶対的正義をもちたがる。それがなければ不安であり、言動の基準を
失ってしまうような気がするらしい。

ところが、複数の宗教を同時に信仰する習慣を持った日本人には、唯一絶
対の神の教えも、不変の掟もない。結局、頼るべきものは「みんなの意見」、

つまり、そのときその場にいる人たちの最有力な多数が正しいと主張することだ。

聖典に書かれた「神の教え」や戒律として定められた「神の掟」とは違って、人のことばや取り決めは変わりやすい。したがって、みんなの考え方が変われば、日本人の正義感も変わってしまいます。日本の歴史には、そんなことが何度となく繰り返されているのである。(p 146)

神を証人にして妻と契約した森有礼 (p 146)

日本人は神よりも人を信じる。日本人には神の絶対性は容易に理解できない。そのことを示す例は古今に数多い。たとえば、明治初期の政治家・森有礼は大変な西洋かぶれだった。薩摩藩の出身だが若くして外国に留学、その後もアメリカ駐在代理大使や文部大臣を歴任、学校制度の確立にも貢献した。もちろん、英語もフランス語も巧みで、自他ともに許す外国通だった。それどころか、文部大臣になると、

「野蛮な日本語を廃止し、フランス語を公用語とすべし」と、まじめに主張したほどだから、その西洋かぶれはほとんど病気といってよいだろう。

これほどだから当然、キリスト教を深く信仰し、結婚式もキリスト教式に行った。つまり、教会の祭壇の前で、「汝はこの女を永遠に妻とすることを誓うか？」と問われ、「イエス」と答える儀式を行ったのである。ところが、森有礼は、この誓いを新妻との誓いと考え、妻とした女性との間で誓約書までつくっている。

これは、明らかに「モーゼの十戒」の中の「汝誓うなかれ」の戒律に反している。ユダヤ教でもキリスト教でも、森有礼がやったような「神を証人にして人間に誓う」ことを厳禁している。祭壇の前で新婦に答える誓いは、神に対する誓約であって、妻となる女性に対してするものではない。裁判や就任式での宣誓も同様である。

日本では古くから、神を証人として人間に誓うことがよくあった。たとえば豊臣秀吉の死期にあたって、徳川家康以下の五大老が八幡大菩薩の起誓紙に、「秀頼公に忠義を尽くす、もしこれに違えば神罰が下るとも異存はない」などと書いて秀吉に渡したのはそれである。ここでは、誓いの相手は「人」であり、「神」はその証人に過ぎない。だから証人となった「神」が、「お前はあの人に嘘をついた」として神罰を下しても異存はない、というに過ぎない。「神」に対して誓ったのなら、必ず神罰が下り、地獄に落ちるのは当然だ。カトリックでは一切の離婚を認めなかったのも、神との誓約は解消できないという考えからだ。妻（または夫）に誓ったのであれば、双方合意のもとに誓約を解消することもできる。「人」に誓う日本では、古来、双方合意の離婚が禁止されたことはない。

日本の公用語をフランス語に変えようとまで主張した西洋かぶれの森有礼も、神を証人として妻となる女性に誓って得意になっていたのだから、キリスト教の倫理観はまったく理解していなかったといわざるをえない。

英語が巧みになろうが、欧米の知識や技術に習熟しようが、洋食好きにな

ろうが、日本人にはヨーロッパの倫理観が何とも理解しがたいという一例であろう。しかし、森有礼も、キリスト教の倫理観が分かっていなかったからこそ、西洋かぶれになれたのだろう。この程度の知識と理解で外国通を自認する日本的甘さに浸った男なら、一神教の厳格な絶対的正義感を知れば、仰天して逃げ出したはずである。(p 148)

はっきり表現しないしないことが文化 (p 212)

明文化した契約でさえも守られないのであれば、日常の会話や会談の席での発言など、さして重要ではない。その価値は、内容よりも雰囲気づくりの音響効果のほうにある。したがって、その場の雰囲気を悪くするような発言は、たとえ内容が正しくとも嫌われる。つまり、日本の社会では、あまりはっきりモノを言うが無作法なのだ。このため、この国では、はっきりことばで言わずとも、態度や表情で意志を通じ合うコミュニケーション技術、いわゆる「腹と腹の伝達」の方法が発達した。そしてそれがさらに進むと、言葉のほうは建前、したがって信じてはならない、ということになってしまう。

たとえば、「京のぶぶ漬け」という話がある。

京都の人が、「まあ、ちょっと上がってぶぶ漬け（茶漬け）など食べていっとくれやす」という。しかし、そう誘われたからといって、「それではお言葉に甘えて」などと上がりこんでメシを食ったりすれば、たちまち、「何と礼儀知らずな、厚かましい」と言われてしまう。しつこく誘っているようでも、それは建前、本心は早く帰って欲しがっていることを読み取らなければならな

い。

逆に、諸般の事情から、「ほな、ぶぶ漬け一杯だけで・・・」

とって客が上がるような場合には、けっして「ぶぶ漬け一杯」など出してはいけない。そんなことをすれば、「客のもてなし方も知らへん」ということになる。客が「ここは上がってご馳走になってもよい」と判断するような場合は、最良の歓待を期待しているのだ。

こうした言いかたは、かなり古くから京の都人には定着していたらしい。

吉田兼好（1283年～1350年）の「徒然草」の中にも、

「東人（あずまびと）は、都の風になじまず心をはっきりと口にする。だが、これは遠国の野人なのだから致し方のないことと、大目にみてやらねばなるまい」という趣旨のことが書かれている。はっきり言葉に出さないことが、「都の文化」だったわけである。「徒然草」が書かれたのは14世紀の前半、「令外の官」たる鎌倉幕府ができて150年、ようやくその体制が乱れだした南北朝時代だったことは注目されてよい。はっきりものを言わぬ風潮は、全社会的な建前と本音の使い分けが定着する中で進んでいたのである。（p 213）

・・・・・・・・

大仏建立時の東大寺は、現在見るものよりもはるかに大きかった。（p 250）大仏殿はいまの2倍ほどの容積だったし、その左右には90メートルを超える七重の塔があったという。全国の人口が500万人以下だった当時と

しては、何とも凄いものをつくったものだ。しかもそれは、日本古来の文化とは正反対に、建物は朱塗り仏像は金箔貼りというきらびやかなものだった。奈良時代の日本人は、いかにも古代文明的な物財誇示の好みをもっていたのである。

しかし、この頃すでに先進国の中国では古代文明が衰退して久しく、宗教的な社会主観の社会、つまり中世が完成していた。このため、日本への技術の流入も一通りのことがすむと中断する。そのうえ、これと一緒に流入した思想はいかにも中世的で、古代文明にあこがれる日本人には受容しがたいものが多かった。素晴らしい先進国で普及しているのだから、よいはずだと思ってみても、どうにも納得ができない。ごく一部の外国かぶれが感心するだけで、一般庶民にはなじめなかった。

このことから日本人は、外国文化のある部分を受容し、外の部分を峻拒する選択の習慣を身につけた。古代の日本人は、中国文化の熱心な模倣者であり、多くのことを中国に学んだが、同時に、外の国々には例を見ない程の頑固な拒否者でもあった。

たとえば「宦官」は中国文化の重要な一部であり、朝鮮や西域はもちろん、遠くペルシアやビザンチンにまで広がった。しかし、日本だけはこの制度をついに入れなかった。遊牧社会の経験がない日本には去勢の技術がなかったからだという説があるが、それだけとは思えない。銅の溶接技術を学んで40年間で世界最大の大仏をつくったほど技術習得力の高い日本人が、去勢の

技術だけは学べなかったはずがない。日本人はその習慣を真似ること自体を拒否したのだ。

日本人が拒否した中国文化のなかには、道教思想や易姓革命、同姓不婚、科挙の制度、北宋画および肉食の習慣などがある。もし日本が、もう500年早く、中国において古代文明が栄えていた漢代に農業革命を起こす状況になっていたとすれば、より多くのことを中国に模倣したかもしれない。

日本が農業革命を進めたとき、先進国・中国は既に中世に入っていた。この時期的ズレは、日本人に外来文化を取捨選択する習慣を身につけさせただけではなく、外来文化の「日本化」をも義務付けた。物財が多いことに幸せを感じる古代的発想に立っていた飛鳥・奈良時代の日本人には、神仙思想や仏教思想にどっぷりと浸った隋・唐の中国思想は、そのままでは受け容れられなかったからだ。

このため、奈良時代も末期になると、中国文化のなかから受け入れやすいものを選んで日本化する動きが強まり、独自の日本文化へと昇華してゆく。日本人が漢字で日本語の発音を書き写すことに満足せず、これを簡略化して表音化する仮名文字（ひらがな、カタカナ）を早々とつくり出したのは、その現れである。（p 252）

.....

日本人は「無為なる時間」に価値を認めない。（p 272）このことはレジヤーやバカンスについてもいえる。もともと「バカンス」は「大いなる空白」

という意味だ。欧米人の発想では空白でなければバカンスではない。だが日本人は、バカンスといえばスポーツか旅行か観劇か音楽鑑賞か、何かをする時間だと思っている。新聞論調にも「休日は増えたけど依然としてゴロ寝組が多い」と嘆かわしげに書いている。ゴロ寝こそが本当のバカンスだ。別荘でも、海岸や野山でも、「無為なる時間」を過ごすために行くのだ、とは思ってもみない。

だから、日本人は短い休暇を勤勉に遊ぼうとする。ハワイの観光局の調査では、日本人が3泊4日でくれば、アメリカ本土の人が2週間滞在するのと同じ額のお金を使うという。アメリカ人は海岸でブラブラして2週間を過ごすが、日本人はタクシーを雇ってあちこちを見物し、買い物にまわり、やたらとゴルフにでかけるので、1日当たりの消費金額は数倍になる。

これが現在の若者になると、さらに著しい。自分の好き嫌いにかかわらず、「スキーをやらないと嫌われる」、「スキューバ・ダイビングができないのは格好が悪い」と必死に訓練をする。何が流行か何をみながしているかを、流行情報誌で探す。彼らの「遊び」は、格好よく見せ仲間を集めるための「修養」なのである。(p 273)

.....

死よりも怖い仲間はずれ

人間は誰しも他人に好かれたいと思う。だが、その度合いが日本人ほど凄まじい民族はいない。とくに日本人が、自分の属する集団のなかで嫌われる

ことを恐れるのは、極端である。日本人が恐れる死以上にこわいのだ。

外国人は（ときに日本人自身も）、日本人は死を恐れぬ民族だと思い込んでいるが、これほど大きな誤解はない。むしろ、外の民族以上に死を恐れる。

たとえばガンと診断したときに、患者本人に告げるべきかどうか、日本の医学界ではしばしば問題になる。日本では多くの場合知らせないが、外国では成人の場合はたいてい本人に知らせる。

「あなたはガンです。あと3ヶ月の寿命でしょう。今のうちに遺言を書き、牧師を呼んでお祈りをしなさい」というわけだ。キリスト教の終油の秘跡は、死ぬ前に行う儀式であり、「お前はこれから死ぬぞ」といって額へ十字に油を塗る。

ところが、日本の仏教の引導は、死んでから棺おけの前で渡す。生きているうちに坊さんがきたら、患者はびっくりしてしまう。不治のガンも同様で、日本では大体において本人には告げないことになっている。このため、患者が遺言を書くこともなく、相続問題をこじれさせる例が少なくない。しかし、それにも合理的な根拠がある。ガンを告知すると結果が著しく悪いのである。

外国の統計では、患者に不治のガンを告知した場合も告げない場合も、ほぼ同じくらい生きるそうだ。つまり確実に死ぬといわれても、それで気を病んで寿命を縮めることは少ないらしい。ところが、日本での統計では、告知した場合には、断然死期が早まってしまう。ある有名なお坊さんが、「自分は若い頃から修行して仏に仕え、精神修養をしてきた。けっしてガンを告げら

れても驚かないから、本当のことを言ってくれ」というので、お医者さんが、
「じつは、ガンです。あと6ヶ月の寿命でしょう」と言ったところ、翌日から食事もできなくなり、2週間で死んでしまったという例もある。医者が病状から判断した期間に比べて、日本人の場合は、告知された人は告知以前の予想寿命の3分の1ぐらいの期間で死んでしまうといわれている。

要するに、日本人は死を恐れるのであり、生命に対する執着、現世的欲望の強い民族なのだ。

では、それほどに死を恐れる日本人から、特攻隊を志願する若者が相当数出たのはなぜか。外国には、切腹や特攻隊が喧伝されているため日本人は死を恐れぬ民族だと思いがちだが、じつは違う。特攻隊を志願して、幸いにも出撃前に終戦になって生き残った人々にインタビューした記録をみると、志願の理由を「国のために死ぬ気になった」と答えた人は、1割以下だった。あとの人々は、「行きたくはなかったけれども、みんながやかましく行け行けというから、断れなくなった。仕方がなかったのだ」というのである。

日本人にとっては、みんなの意向、つまり自分の属する集団の意志と見られるものに逆らうことは、恐ろしい死以上に恐ろしい。水利に頼る水田農業に親しみ、村落共同体を離れては生きていけなかった日本の伝統が、集団に逆らえない性格と習慣を、日本人全体に植え付けたのである。(p 291)